

「人にやさしいアーカイブズ」

— 大学史資料をどのように活用するか —

桑 尾 光 太 郎

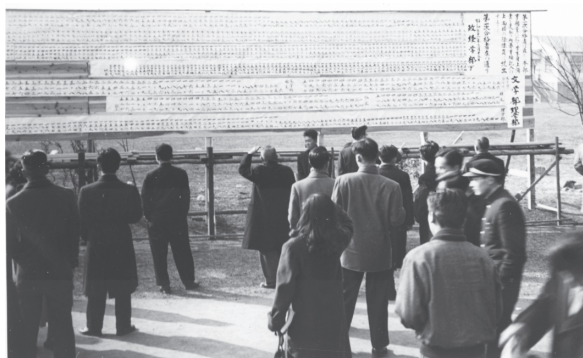


図1 合格発表（1956年）

はじめに

本日は、学習院という学校にはどのような史資料があるか、その史資料を通じて学習院アーカイブズがどのような活動をしているかをご紹介したい。その活動はさまざまな課題を抱えたままで神奈川大学に遠く及ばない面もあるが、少しでもご参考になるところがあれば幸いである。冒頭に一九五六（昭和三一）年の合格発表の様子を撮った写真（図1）を掲げた。撮影された当時はどこにでもある風景だったかもしれないが、六〇年を経ると大学の歴史のひとコマを切り取った資料として、展示や図録などで利用されている。こうした平凡な記録や文書こそが、貴重な歴史資料となっていくことを最初に述べておく。

アーカイブズという言葉の意味については、とりあ

えず「保存・活用し未来に伝えるべき重要な記録、またその記録を保存・公開する機関」としておく。大学アーカイブズとは大学のそうした記録を扱っている機関・部署のことで、アーカイブズとは名乗らなくても年史編纂室・図書館・博物館などが同様の役割を果たす場合も多い。日本でも古い歴史をもつ大学では、例えば東京六大学、京都大学や同志社などのように、図書館・博物館とともにアーカイブズが設置されて活発な活動を展開している。

1. 学習院の沿革と年史編纂

学校法人学習院は大学、女子大学、高等科、中等科、女子中・高等科、初等科、幼稚園の七学校と法人本部により構成され、目白・戸山・四谷の三キャンパスをもつ。二〇一六（平成二八）年度の学生生徒児童園児数は一四、〇七六人、専任教職員数は八一四人である。各学校がそれぞれ独自の歴史を有し、法人の事務組織である学習院アーカイブズは、法人と各学校全ての歴史や史資料に関する業務を担当している。

学習院の起源は、一八四七（弘化四）年京都におかれた公家の学問所で、一八四九（嘉永二）年に孝明天

皇より「学習院」の額（勅額）を下賜されて校名が定まった。京都学習院は明治維新を経て廃止されたが、一八七七（明治一〇）年東京に華族学校が開設され、再び学習院と命名され勅額が下賜された。現在の学習院はこのときを創立としている。一八八四（明治一七）年、学習院は宮内省所管の官立学校となり、翌八五年には女子中・高等科の前身である華族女学校が開設され、学習院女学部・女子学習院と名称を変えながら学習院とは別途に女子教育を行った。現在の目白キャンパスに学習院が移転したのは一九〇八（明治四一）年のことで、当時は乃木希典院長をはじめ鈴木大拙など著名な教員が在職していた。またこの時期の前後には白樺派として活躍する学生も在学していた。

一九四五（昭和二〇）年の敗戦の後、学習院・女子学習院は存続の危機に陥った。そこで華族教育という目的を廃して一般の学校になるとともに、宮内省から離れ私立学校として独立するべくGHQとの交渉が重ねられた。一九四七（昭和二二）年、学習院と女子学習院は合併し財団法人学習院が発足、私立学校としての第一歩を踏み出し、一九四九（昭和二四）年に学習院大学が、翌五〇年に学習院大学短期大学部（現学習

院女子大学）が開学した。

以上、学習院のあゆみは近代日本の出発、発展や挫折の過程と軌を一にしており、東京大学はじめ明治初期に創立した他大学と同様に、一九七〇年代から学習院百年史編纂事業が進められた。その際に収集された史資料をもとに総務課院史資料室が設置され、現在は学習院アーカイブズの中核をなす史資料として引き継がれている。百年史編纂の時期に資料目録、歴任教員の履歴、年表などのカードが作成され、このカードは現在でも頻繁に利用されている。

一九九〇年代には学習院大学五十年史編纂事業が開始され、私が実務担当として資料の調査・収集と執筆編集にあたった。当初私は大学史編纂に関する知識は皆無だったため、東日本大学史連絡協議会（現全国大学史資料協議会）に参加して他大学の担当者の方から大学史の仕事の基礎を教わった。以来、神奈川大学の澤木武美氏・齊藤研也氏にはお世話になり続けている。

大学史とはいってもなく同時代史であり、叙述のために参照する資料はいわゆる歴史資料に限らず、近年作成された業務文書等も必要となる。そこで学内各部署の書棚や倉庫にある文書ほかさまざまな資料の調

査に着手し、日常業務の中で作成される平凡な記録こそ、重要な歴史資料となり得ることを体感していた。学校案内や募集要項のバックナンバー、会議の議事録、改廃された規程といった重要な資料が、案外系統的に残されていないことも知った。思い返せば、大学史編纂における経験は自然にアーカイブズへの発想につながっていったといえる。

大学五十年史編纂は二〇〇一年度で終了し私は一時期学習院を離れたが、その後も『半世紀―学習院女子短期大学史』（二〇〇三）、『学習院女子中等科 女子高等科 一二五年史』（二〇一〇）、『がくしゅういんようちえん―創立五〇周年記念誌』（二〇一三）といった各学校の年史編纂が企画され、関連資料の調査収集・整理が進められた。二〇〇八（平成二〇）年にはアーカイブズ研究ならびにアーキビスト育成を目的とする日本で初の大学院である人文科学研究科アーカイブズ学専攻が開設され、二〇一一（平成二三）年に院史資料室を改組する形でようやく学習院アーカイブズが発足した。

2. 学習院アーカイブズの目的と所蔵史資料

学習院アーカイブズは発足以来二つの目的を掲げている。ひとつは「史資料により学習院の歴史と伝統を確認する場として、教育研究・広報などの諸活動に寄与する」という、どの大学アーカイブズも取り組んでいる一般的なものである。もうひとつは学習院で業務上作成される「文書の整理と管理を進め、事務効率の向上など業務改善に寄与する」というもので、非現用（保存年限を越えた）業務文書を受入れ選別・保存する「機関アーカイブズ」としての役割を果たそうとしている。

学習院アーカイブズが所蔵する史資料には、まず明治期から昭和戦前期にかけての官立学校時代に作成された公文書があり、閲覧利用される機会が最も多い。たとえば華族女学校時代の「式事録」には、皇后（昭憲皇太后）が学校に行啓し授業参観を行ったときの授業時間割が綴じられており、下田歌子の修身や津田梅子の英語の授業を参観したことがわかる。一八八三（明治一六）年から残されている「教務日誌」や「庶務日誌」は、日常の教育や学校行事がつぶさにわ

かる、教育史研究にとって一級の資料である。一九一二（大正元）年九月一三日の「庶務日誌」には、乃木希典院長が自刃したとの報せに「驚愕悲痛措クトコロヲ知ラス」と記され、学習院の史資料が同時に日本の近代の動向を伝えるものであることを教えてくれる。また一九四五年の「雑件録」には、敗戦直後の八月一八日付で機密文書の焼却を指示する大臣官房主管からの通達（図2）が綴じられており、「雑件」だからといって軽視すべき簿冊ではないことがわかる。

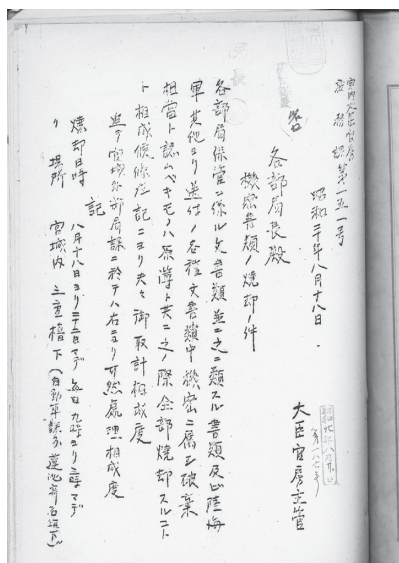


図2 「雑件録」(1945年)

ついで所蔵資料の中核を為すのは、戦後期の一九四〇年代から六〇年代にかけて作成された文書である。学習院が宮内省から離れる際のGHQとの交渉記録や、私立改組直後の理事会評議会記録、学習院大学開設時の設置認可書類や教務関連文書等々が含まれている。作成された時期を反映して文書の大半が酸性劣化したわらばん紙であり、少しずつ脱酸処理ならびにデジタル化などの措置を講じているものの、現状は根本的な解決にはほど遠い。こうした官立学校時代の公文書や戦後期の文書は、いうまでもなく学習院にとって貴重な歴史資料であるが、そのほとんどがかつて日常の業務において作成された文書であり、最初から重要と認識されていたわけではない。現在作成されて身の回りにおかれている業務文書も、保存して後世に伝えていこうという意識が私達になれば、散逸してしまいう可能性が高い。

学習院という組織の中で作成・保存されてきた文書のほかに、元教職員・卒業生やその遺族、ゼミやクラブのOB等から寄贈された個人資料も多く収蔵されている。つまり「機関アーカイブズ」に加えて、個人資料を集積した「収集アーカイブズ」の機能も学習院

アーカイブズでは大きな比重を占めているのである。たとえば学生証は誰もが持っていた割には残されにくい資料のひとつで、卒業生から寄贈された大学初期の学生証は大変貴重である。また卒業生の遺族から寄贈された昭和初期の学生寮の献立表は、日常生活で消費され別段重要とも思われない文書が、年月を経て興味深い歴史資料に変わっていった典型的な例であろう。個人から寄贈される資料の一つ一つには、愛校心という一言では表現できない、寄贈者の学習院に対する思いが詰まっている。そうした学校に対する人々の思いを受け取る場として、アーカイブズは大学の中で重要な役割を果たしていることを実感している。

文書以外の資料について、まず写真類は利用頻度が高いため整理やデジタル化を進めている。履修要項や学生便覧・学生新聞・広報誌紙といった印刷刊行物も、バックナンバーを蓄積しておく貴重な歴史資料となる。本年学習院国劇部から寄贈された創立（一九四七年）期の資料には、学習院の学園祭である「輔仁会大会」のプログラムが含まれていて、これまで学内に残されていなかった年のものも発見された。プログラムには学生時代の吉村昭、オノ・ヨーコ、岩城宏之

らの活躍が記され、学習院が戦後文化の担い手を輩出してきたことも実感できる。くわえて乃木希典院長の遺品や書軸・バッジ・門標・教育教材といったモノ資料も所蔵しており、乃木資料については、乃木神社や明治神宮などでの特別展に際し貸出しを行ってきた。

3. 学習院アーカイブズの業務

― 文書・史資料の受け入れと活用 ―

先に述べたように学習院アーカイブズは「機関アーカイブズ」としての役割、すなわち学内の各部署で作成される業務文書について、現場で使用する「現用」の段階から整理・管理をすすめる、保存年限の終了した「非現用」文書をアーカイブズへ移管するシステムを構築しようとしている、私立学校は国立大学と異なり公文書管理法（二〇一一年施行）や情報公開法（二〇〇一年施行）が適用されるわけではなく、文書の管理・保存や公開は義務とはされていない。文書管理・保存のシステムを構築していく意義は、私学自身が見出すものであり、学習院は曲がりなりにもその意義を自覚し始めたと言える。

私立学校となつてからの学習院には長い間文書管

理・保存に関する規定はなく、文部省からの指導を受けてようやく一九九四（平成六）年に「学習院文書取扱規程」が施行された。同規程は文書の保存・廃棄について、文書ごとに保存期間を設定するように定めたが、それを実際に行つた部署は少数に限られ、多くの部署は書棚や倉庫が満杯になると必要に迫られ整理する状況が続き、配慮に欠ける文書廃棄を防ぐことができなかった。とくに二〇〇〇年代に入ると個人情報保護の強化がうたわれ、学生課外団体の設立書類など歴史資料として重要な文書が廃棄されてしまった。そして大学改革が叫ばれ、学生利用スペースの拡充が図られる裏では、倉庫・収蔵スペースなどバックヤードの慢性的な不足が続き、やむなく文書の外部倉庫への管理委託を行う部署も相次いだ。こうした問題の解決のため、各部署では使用しない文書を受け入れ選別・整理する主体の必要が認識され、学習院アーカイブズの設立につながった。

学習院では二〇一三（平成二五）年から事務部署で「文書ファイル管理簿」の作成を開始した。各部署で作成した文書ファイルを目録化して、配架場所や作成年、保存年限などを明示する作業であり、事務効率の

向上とスペースの有効活用ならびに説明責任（アカウンタビリティ）が全うされることを目的としている。学習院アーカイブズは各部署の管理簿作成を支援し、保存年限を完了して各部署から移管された文書ファイルを選別・保存する。総務部や学生センターのように過去の文書ファイルを大量に保管している部署については、学習院アーカイブズのスタッフが倉庫に向いて、管理簿の作成を代行している。その作業は、将来保存年限が終了した後アーカイブズに移管される可能性の高い文書ファイルの予備調査も兼ねている。

大切な点は、文書ファイル管理簿が各部署の業務改善のために活用されることであり、学習院アーカイブズのために管理簿を作成するわけではない。二〇一四（平成二六）年には「学習院文書取扱規程」が改正され、「保存期間の満了した文書は原則として学習院アーカイブズに移管する」ことが明記された。文書ファイル管理簿で文書の所在を把握し、非現用の文書は学習院アーカイブズに移管するという、機関アーカイブズとしてのシステムが徐々に整いつつある。そして移管された文書ファイルは、評価選別のうえ学習院史の基礎資料として保存・活用されるのである。

この他、史資料の受け入れに関する業務としては、学内に残される年代が古く未整理の資料の調査・整理がある。これまで大学図書館所蔵古写真の整理とデジタル化、初等科に所蔵される明治以来の教材資料の調査などを実施してきた。二〇一二（平成二四）年、女子中・高等科の校舎改築にあたり倉庫から運び出された資料を整理していたところ、焼け焦げた昭和戦前期の成績原簿（図3）が出てきた。女子中・高等科の前身にあたる女子学習院は、一九四五年五月に空襲で青山にあった校舎を全焼した。その後教職員が焼け跡から成績原簿を掘り出して現在の戸山校舎に運び込んだと思われるが、この資料を発見した途端、部屋中に焦げた臭いがたちこめ、被災の状況をリアルに感じたことが印象に残っている。

学習院アーカイブズの特徴は、資料閲覧や各種レファレンスの件数が多いことで、正確な数の把握を怠っているが年間約二〇〇件に及んでいる。広報部署と連携してマスコミ取材や撮影等に対応する機会も多く、学習院の広報戦略の一翼を担っているといっても過言ではない。学内外からの多様な問い合わせへの対応に忙殺される毎日であるが、回答するための調査

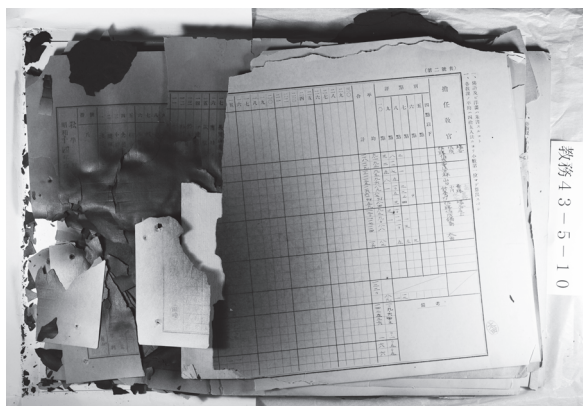


図3 焼け焦げた成績原簿

や、質問者・資料利用者とのコミュニケーションを通じて、新たな知見を得ることも多い。アーカイブズは卒業生・研究者・地域住民といった、いわゆるステークホルダーといわれる人々と学校とを結びつける役割を果たしている。演題に挙げた「人にやさしいアーカ

イブズ」は、元国立公文書館長の菊池光興氏から学習院アーカイブズへの要望としていただいた言葉であるが、誠実なレファレンス対応を積み重ねながら、さまざまな人や情報が集まる場として、教育研究の支援はもちろん学校や社会への貢献を果たしていきたいと考えている。

教育研究への支援については、大学基礎教養科目「近代日本と学習院」を担当し、アーカイブズ所蔵史料の紹介を軸に授業を進めているほか、大学生や高校生がアーカイブズを訪れ、史料を実際に手にとる機会や、教職員や父母・同窓会を対象に研修や講演を行う機会も増えている。授業で接してみると学生生徒は潜在的に自校の歴史に興味関心を抱いていて、実際に史料を前にすると目を輝かせて反応している。アーカイブズが果たす教育的役割には、大きな可能性があると感じている。

4. 山積する課題

以上のような学習院アーカイブズの活動は、多くの課題を抱えている。最大の課題は収蔵スペースの不足で、文書取扱規程を改正して文書がアーカイブズへ移

管される流れを形成したといっても、移管された文書を受入れて評価選別作業を進めるだけのスペースが確保できていない。これは学習院アーカイブズ設立以来解決されておらず、全学的なキャンパスプランの中で検討されなければ事態は進展しない。その検討は本年になってようやく開始された段階で、今後の見通しは未だ立っていないが、学習院では文書や歴史資料のみならず図書収蔵スペースも慢性的に不足しており、図書館や各研究室、事務部署の倉庫スペースなどと併せてアーカイブズのスペースも検討していかなければならない。

文書ファイル管理簿の作成更新による文書管理については、事務職員が常駐する部署については定着・習慣化が進んでいるが、学内には大学学部学科研究室ならびに附置研究機関、高校以下の学校の教務課・生徒課などのように教員が事務を行い業務文書を作成している部署が多く、そうした組織の文書の調査・管理は未着手の状態である。とはいえ教員組織からも非現用文書の選別や移管についてアーカイブズへの相談が届いており、それらへの対応を通して学内全体への支援を浸透させていく必要がある。

非現用の文書をどのように評価選別していくかも試行錯誤の状態であり、近年作成されているデジタル文書保存への対応も不十分である。また神奈川大学ほか多くの大学アーカイブズが行っている紀要や資料集などの研究・出版活動も手つかずとなっている。展示活動も今のところ消極的であるが、本年六月に法人からの要請を受けてアーカイブズ所蔵史資料を使い、大学史料館と共同で展覧会「山梨勝之進・安倍能成戦後学習院の出版」を開催した。山梨勝之進院長五十回忌、安倍能成院長没後五十年の記念式典に付随する企画だったこともあり一二日間という短い開催期間であつたにもかかわらず、見学者約一三〇〇人という大きな反響を得た。見学者のうち約七〇〇人は在学生・生徒であり、改めてアーカイブズ所蔵史資料の紹介が教育面において有効であることを認識した。

展示スペースの設置については博物館相当施設である大学史料館との連携が必須であり、また大学史料館と大学図書館には、アーカイブズ設立以前から学習院関係史資料が多数所蔵されている。アーカイブズは前述のように古写真ほか大学図書館所蔵の関連資料の整理・デジタル化を進めてきた。史料館も企画展示を

行うにあたり、アーカイブズ所蔵史資料を頻繁に調査利用している。図書館・史料館・アーカイブズの三者は所蔵資料の情報交換やレファレンス対応等で絶えず連絡をとっており、学習院のような小規模の組織において、もはやL (Library)・M (Museum)・A (Archives) の連携は言わずもがなのことである。

おわりに

以上のように、大学史資料を取り扱う大学アーカイブズには、さまざまな業務と課題がある。人員・予算・スペースが限られるなか、多様な業務の中で何を優先させ実行していくかが、その大学アーカイブズの特徴や個性となるであろう。アーカイブズの業務の中で重要なはその継続性であり、できる範囲の業務を細くとも長く続けていくことが肝要と思われる。また冒頭に述べた通り、大学史資料とはいわゆる古い歴史資料だけではなく、近年の業務文書や印刷物など一見平凡な資料こそ、選別を加えたうえで保存していくことが求められる。どのような資料も残そうと意識しなければ散逸する危険がある。最後に、大学アーカイブズは研究教育・広報・業務改善や地域連携ほか、学

校運営に貢献してこそ存在価値がある。人と人をつなぐ「人にやさしいアーカイブズ」であることを目標に、今後も業務に取り組んでいきたい。